

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ



共に生き共に学ぶ

県立伊勢崎高等特別支援学校訪問

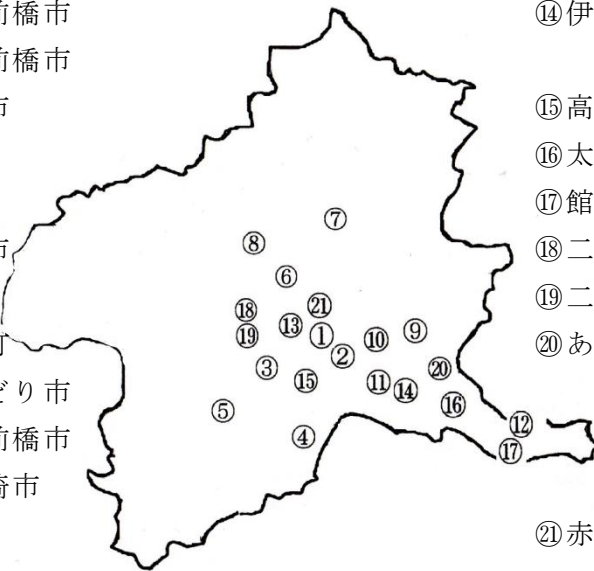
伊勢崎市境にある県立伊勢崎高等特別支援学校を訪問しました。知的障害のある生徒たちの学びの場は生徒と教職員の関係が密接で緊張感に満ちたものでした。その様子を伝えることは、読者のみなさんに「教育」についてさらに深く考えてもらう機会を提供できるのではないかと考えて報告します。

群馬県の特別支援学校

現在（2016年4月1日現在）、県内の特別支援学校は県立21、市立4、私立2、群馬大学教育学部附属があります。そのほかにも病院内に設けられた分室が5つあります。

県立特別支援学校所在地（③以下の校名の「特別支援学校」を省略・カッコ内は対象生徒）

- | | |
|----------------|--------------------|
| ① 盲学校（幼少中高）前橋市 | ⑭ 伊勢崎高等（高）
伊勢崎市 |
| ② 聾学校（幼少中高）前橋市 | ⑮ 高崎高等（高）高崎市 |
| ③ 高崎（小中高）高崎市 | ⑯ 太田高等（高）太田市 |
| ④ 藤岡（小中）藤岡市 | ⑰ 館林高等（高）館林市 |
| ⑤ 富岡（小中）富岡市 | ⑱ 二葉（小中）高崎市 |
| ⑥ 渋川（小中高）渋川市 | ⑲ 二葉高等（高）高崎市 |
| ⑦ 沼田（小中）沼田市 | ⑳ あさひ（小中高）桐生市 |
| ⑧ 吾妻（小中）中之条町 | |
| ⑨ 渡良瀬（小中高）みどり市 | |
| ⑩ しろがね（小中高）前橋市 | |
| ⑪ 伊勢崎（小中）伊勢崎市 | |
| ⑫ 館林（小中）館林市 | |
| ⑬ 前橋高等（高）前橋市 | ㉑ 赤城（小中高）前橋市 |



最初の県立特別支援学校は1973年(昭和48年)にみやま養護学校(現高崎特別支援学校:高崎市乗附町)として開校しましたが、それ以来、地域の保護者の要請に応えるかたちで県内各地に開設されました。特に近年、義務教育を修了した子どもたちに高校教育を望む声が強くなり、県内全域に高等特別支援学校の設置が望まれてきました。

ここはかつての県立境高校

取材陣が訪れたのは3月中旬。そぼ降る雨の中、風格ある校門をくぐるとなつかしさがこみ上げてきました。ここはかつての県立境高校。あたりの景色は変わっていません。

校長室で中島賢二校長と渡邊敬子教頭から学校の沿革について説明を受けました。2006年度末に閉校となった境高校の校舎跡地を利用して翌2008年4月に前橋高等養護学校(現前橋高等特別支援学校)の分校として開校し、昨年度から単独校になったそうです。高校の校舎を特別支援教育に対応できるように改修を進め、単独校として独立してからは、施設・設備の充実もより進んでいるということです。

普通科と産業科があり、今年度は1年生23名、2年生17名、卒業した3年生は17名が在学していました。教職員は40名ほど。コミュニケーションを重視した教育方針、「地域で学び、地域の支援で社会自立を目指す」を掲げています。

駅に近い特別支援学校

境地区は昔から福祉に理解があり、先の教育方針を進めるには恵まれた環境だとも言います。電車の駅に近い、町の中心に立地することは特別支援学校としては珍しいことですが、自転車や電車に乗り、住民と接しながら通学することは子どもたちの成長に大きく貢献しているとのこと。

教育方針にそって、生徒たちは校外に出かけることも多く、100円ショップでの買い物、郵便局で切手を購入して投函する、昼食を兼ねてレストランで食事体験など、ここでも市街地という地の利を活かした教育が行われています。



就労支援員も配置されていて、卒業生の就労定着率は高いようです。

校内見学

渡邊教頭に案内されて校内を見学させていただきました。歩き始めて見る校内の様子は、高校で長らく教員生活を経験してきた取材陣にとってはどこもなじみ深いものでしたが、窓にはめ込まれた耐震構造には違和感を禁じえませんが同様の対応で基準をクリアしている県立学校は少なくありません。また教頭先生の説明を受けるまで気づかなかったのですが、生徒にとって階段の幅は狭く、勾配は急であるとのこと。足の不自由な生徒や認知能力に障害がある生徒には少なからず困難をもたらすようでした。



産業科2年生の授業を見学

最初は被服の作業。アームカバー、弁当袋、巾着などを作製中。ミシンの使い方が巧みでした。大小の洗濯バサミや竿ストッパーの組み立て作業、ウオーターサーバーの分解作業などを行っている教室では、先生が作ってくれた生徒一人ひとりに合った補助具を使って作業をおこなっていました。週8時間。離席しないで黙って作業できるように、また卒業後、給料が少しでも多くもらえることを目指して実習しているとのことでした。



次に木工実習。部材を同じ寸法に切って、ガスバーナーで焦がし、ニスを塗り、組み立てる作業。文化祭で販売するためのもので、機械と手作業で丁寧に物をつくる訓練をしているとのことでした。

次は陶芸。習熟度に合わせて手法を4つに分けてあります。4技法とは、難度の順にろくろ、たたら、ひねり、流し込み。今3学期なので、今までやってきたことの総まとめをしていました。作品は文化祭で販売しました。



産業科1年生ボールペン組み立て作業

ボールペンを流れ作業で組み立てていました。最初は一人で組み立て作業を徹底してやり、全行程の手順を覚え、ミスをださないように熟練し、それから全生徒による流れ作業に移るのだそうです。この日、生徒たちは6人で1チームを作り、材料供給から組み立てラインによる組み立て、製品の点検と納品まで一連の作業を2時間連続で行っていました。実際の工場で働くのと同様に、仲間と協同して働くことができる力を身につけることを目標にしています。

ライン上の部品がなくなると生徒が大きな声で補充の声をかける。その部品を預かる生徒が大きな声で「ハイ」と返事をして調達作業を行う。完成品が一定の数で出来上がると「検品お願いします」と係の先生のところへ持って行く。先生は点検をして預かる。その繰り返しが丹念に行われていく。私たちが見学している時間に作業が滞ることはありませんでした。そこまで到達するのにいろいろな失敗と工夫を重ねてきたそうです。



普通科1年生の音楽授業

「どこかで春が生まれてる」

廊下を歩いていると歌声が聞こえてきました。「あ、音楽の授業だ!」と、急いで階段を上り音楽室に足を踏み入ると、1年生の生徒が6人、女性の先生の指揮で校歌を歌っていました。もう一人の女性が奥でピアノを弾いて伴奏していました。

- ♪ 青空高く あざやかに
- ♪ きらめく若葉 唐楓
- ♪ すみゆく風に 夢のせて
- ♪ 明日に向かい はばたこう

先生のリードにしたがって体を左右に揺すり



ながら歌う男子生徒や私たちの姿が気になり脇見をしてしまう生徒に先生が優しく語りかけます。そしてもう一人の女性の先生が、生徒の後ろからそっと体に触れ声をかけてサポートしています。



黒板にこの時間のプログラムが書いてあります。
 ①校歌 ②どこかで春が ③カルメン ④たき火(がっそう) ⑤リクエスト
 …ずいぶんバラエティに富んで楽しそうです。
 どんな展開になるのか、興味津々。

「どこかで春が」を歌う前に、CDで聴く。

- ♪ どこかで春が生まれてる
- ♪ どこかで水が流れ出す
- ♪ どこかでひばりが鳴いている
- ♪ どこかで芽の出る音がする
- ♪ 山の三月そよかぜ吹いて
- ♪ どこかで春が生まれてる

先生が「知っていた?」と聞くと、知っていた生徒もいました。「いつの曲かなあ?」と聞くと「3月の歌」と答えます。「そうだね、今3月だから今の歌だよね。」「みんなひばりって知ってる?知っている人」の質問には誰も答えません。「では、見せてあげましょう」と言って先生がひばりの写真を見せると「わかった」の声。生徒の中から「鳥」と声があがります。「じゃあ、ひばりはなんて鳴くか知ってる?」これも生徒は無反応。そこで先生は「秘密兵器」のスマホを取り出し、ポンと画面をタップすると「ピークパーチク…」あの独特の鳴き声が教室に響きました。いた。こうして「導入」が終わったところで、みんなで声を出して歌いました。



こういう歌は今も音楽の教科書にのっているのでしょうか。見学のあとで選曲理由を聞いたところ、地域の老人施設を訪問して歌を披露するときにお年寄りと一緒に歌えるように、昔の歌も練習しているのだそうです。歌いながら生徒たち自身が「どこかで春が生まれる」ことを感じ取るセンス（感受性）を育ててほしいと思

いました。

さて、次の「カルメン」や如何に？また先生が CD をかけてくれました。ビゼーのカルメン序曲、調子のいい行進曲。先生が差し出した箱の中から、それぞれの生徒がお好みの楽器を取ってスタンバイ。そして、なんと CD の演奏に合わせて、自由に鳴らしたりたたいたり揺らしたり…、楽しそう。音楽を体で楽しんでいる。

もう一つの音楽授業

音楽室を出て校長室に戻る途中に1年1組の教室から歌声が聞こえてきました。教頭先生の説明は「音楽室に入れないうちもいて1対1の授業をしています」でした。文字通り「個に応じた教育」が展開されているのでした。

校庭の唐楓（トウカエデ）は学校のシンボルマーク

見学の途中、二階のベランダから外を見ると巨木がありました。樹齢 180 年といわれるトウカエデです。まだ葉をつけていないがやがて丸みを帯びた葉が生徒の目を楽しませてくれるでしょう。校歌にも歌われている唐楓、今年、この葉が校章に制定されました。

この学校は敷地内に畑をもち、ここで生徒たちは作業学習の一環としての農業園芸に取り組み、ゴボウ・ニンジン・ネギなどの野菜やパンジーなどの花を栽培しています。

収穫したものは文化祭やぐんま教育フェスタで販売されます。福祉作業所からの注文で販売することもあります。このような作業学習を経験することで一般就労への道が開けることを目指しています。

小雨降る中、トウカエデに見守られて農業

園芸作業に取り組む生徒たちが黙々と用具の片づけをしていました。



卒業生が働く「中澤カフェ」は築 130 年の古民家

ここで、時間が前後しますが、学校見学後に立ち寄った「中澤カフェ」について報告します。この店は、社会福祉法人「キャッチジャパン」の障害福祉サービス事業所「ぶどう

の木」が運営しています。フォーラム会員で、ぶどうの木の理事でもある白石ひろみさんの紹介で知りました。ここで障害者はカフェでの接客や調理補助、店内の掃除といった仕事

をしています。アンテナショップでは、クッキーやビーズなどの手芸品を販売し、工賃アップにつなげているそうです。伊勢崎高等特別支援学校の近くにあり、卒業生の就職先の一つでもあります。

この店を寄付した中澤家は江戸時代に造り酒屋、その後薬屋となった旧家で、明治 20 年代に建てられた大きな古民家を活用して昨年オープンしました。店内はゆったりした奥座敷を上手に使って落ち着いた雰囲気を出し、調度や掛け軸などは歴史を感じさせます。寒い雨の中を駆け込んだ私たちはほっと一息、出された特製チーズケーキとコーヒーはお手頃な値段で、とても美味しかったです。敷地内には蔵もあり、演奏会や作品展の会場としても利用するそうです。また広い庭園は

バラや庭木が植えられており、一般開放されています。地元の人たちも「地域の人が集まれる場所、まちを元気にする拠点にしていきたい」と応援しているとのことでした。こんなふうに、人々が気軽に普通に交流できる関係が育ち、そこで障害者が活躍できるような場所がどこの町にも地域にもあってほしいと願いつつ、カフェをあとにしました。



取材の終わりに：「誰もが同じ人間として平等である」

校内見学を終えて私たちは再び、校長先生たちと話をする機会を持ちました。

見学した授業の中には私たちが気づかなかった大切なポイントもあったようです。作業学習の一つに陶芸が選ばれているのは土を触ったときの感覚が心を落ち着かせるからだとのこと。また、土は壊せる、壊してまた作り直すことが容易だという利点もあるとのことでした。その点は、障害の重い生徒にも取り組みやすさを提供しているといえます。

様々な作業学習が直接、社会に出たときに役立つという観点で行われているわけではなく、作業を通じてコミュニケーション能力、体力、報告や連絡の能力、指示を聞き入れる力、持続力などを高めることがねらいだとのことにも説得力がありました。

取材陣から、生徒一人ひとりの障害の状況に応じて先生方が献身的に指導に取り組んでいる姿に感銘を受けたことを伝えたところ、中島校長からかえってきた言葉は「うちの学校の施設は十分とは言えませんが人についてはすごく恵

まれています。指導力がうちの学校のウリです」でした。これにはまったく異論がありません。

しかし、先生方の献身的な努力が働く条件に厳しさをもたらしていることも事実です。生徒の登校指導からかかわっている先生をはじめ、多くの先生が始業から 3 時 40 分の下校時までほとんどの時間を生徒に密着して一日を過ごしています。担任の先生は昼食も生徒といっしょにとります。このような状況の中で成長するチャンスを得ていることは生徒にとって幸せではありますが、そのために学校では事務処理や会議等の効率化の努力を注いでいるそうです。

最後に、「障害がある人に対する心理的な壁や同情を寄せる気持ちが存在することは否定できないが、誰もが同じ人間として平等であるという思いを育ててほしい」という校長先生の言葉を聞いて、特別支援教育の現場に教育の本質が存在することを感じたことを皆様へ報告します。

取材に関係してくださった方々に感謝します。
《取材・撮影・編集：倉林順一・須田章七郎・瀧口典子・平井敏久》